

2020年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(秋期・一般選抜) 問題

外国語 日 本 語

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

2020年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(秋期・一般選抜) 問題

外国語(日本語)

1. 次の文章を読み、後の問に答えよ。

生物が体験しているのは、その生物とは独立な客観的「環境(Umgebung)」ではなく、生物が行為と知覚の連関として自らつくりあげた「環世界(Umwelt)」である。生物を機械的な客体とみなす行動主義が隆盛を極めた時代に、生物を一つの主体とみなしてこのように論じたのはドイツの生物学者フオン・エクスキエル(一八六四～一九四四)だ。

エクスキエルの発想は(1)ソボクである。どんなに美味しいケーキがあっても、獣の血液を追い求めている蚊はそれにア。ある生物にとって強烈な「意味」を持つ刺激も、ほかの生物にとってはまったく無意味であり得る。私たちはともすると、あらゆる生物が与えられた客観的な環境の中を生きていると思いがちだが、それぞれの生物を取り囲んでいるのは、あくまでもその生物に固有の局所的な世界(＝環世界)である。エクスキエルによれば、蝶には蝶の環世界があり、蜂には蜂の環世界がある。

その著書『生物から見た世界』の冒頭で、エクスキエルはマダニの環世界を描写している。マダニにとって生物学的に意味を持つのは、周囲からやってくる膨大な情報のうち、ごく一部分だけである。交尾を終えた雌のマダニは灌木の枝先で動物を待つ。そこに、哺乳類の皮膚から分泌される酪酸の匂いが漂ってくると、(A)「人がで身を投げる。無事(2)獲物の上に着地すると、今度は嗅覚の代わりに熱をたよりに動き出す。なるべく毛のない温かな場所を探し、そこで動物の皮膚の中へと潜り込むのだ。

酪酸の匂い、動物の皮膚の感触と温度、そしてこれらの刺激に駆動されてのいくつかの単純な行為。これがマダニの環世界のすべてである。それ以外の環境の膨大な情報や行為の可能性は、マダニにとっては無意味であるどころか、そもそも存在しないも同然だ。

マダニの環世界を論じるときに、マダニにとって酪酸がどんな匂いや味がするかは問わない。ただ、酪酸が生物学的に重要なものとしてマダニに作用するという事実だけに注目する。そうしてエクスキエルは(3)シンチヨウに、生物学の世界に「生物から見た」視点を導入したのである。

『生物から見た世界』の終盤に「魔術的環世界」と題された章がある。その冒頭に、ある少女の話が登場する。

その少女はマッチ箱とマッチで、お菓子の家やペンゼルとグレーテルと魔女の話をしながら一人で静かに遊んでいる。すると突然、「魔女なんかどこかへ連れていつちやつてー! こんなこわい顔もう見ていられない」と叫び出す。この話を紹介しながらエクスキエルは、「少なくともこの少女の環世界には悪い魔女がイ現れていたのだ」とコメントしている。

この少女の環世界には明らかに、彼女の想像力が介入している。ダニの比較的単純な環世界とは違い、彼女の環世界は外的刺激に帰着できない要素を持っている。それをエクスキョルは「魔術的(Magische)環世界」と呼んだ。

この「魔術的環世界」こそ、人が経験する「風景」である。

人はみな、「風景」の中を生きている。それは、ウ的な環境世界についての正確な視覚像ではなくて、進化を通して獲得された知覚と行為の連関をベースに、知識や想像力と言った「主体にしかアクセスできない」要素が混入しながら立ち上る実感である。何を知っているか、どのように世界を理解しているか、あるいは何を想像しているかが、風景の現れ方を(4)サユウする。

「風景」は、どこから与えられるものではなくて、絶えずその時、その場に生成するものだ。環世界が長い進化の来歴の中に成り立つものであると同様に、風景もまた、その人の背負う生物としての来歴と、その人生の時間の蓄積の中で、環境世界と協調しながら生み出されていくものである。

そうして(5)私たちは、いつでも魔術化された世界の中を生きている。いや、絶えず世界を魔術化しながら生きている、と言った方が正確だろうか。

数学もまた、数学に固有の風景を(5)編む。歴史的に構築された数学的思考を取り巻く環世界の中を、数学者は様々な道具を駆使しながら行為(＝思考)する。その行為が、新たな「数学的風景」を生み出していく。

(森田真生『数学する身体』(新潮社)による。123～126頁)

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナは漢字に改め、漢字にはその読みを記せ。

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

問二 空欄アに入る適切な語句を次の中から選び、○を付けよ。

①耳をかさない

②目をむかない

③目もくれない

④目にかけない

⑤音がまわらない

問三 空欄イに入る適切な語を次の中から選び、○を付けよ。

- ①むぎむぎと ②しずしずと ③やすやすと
④くよくよと ⑤ありありと

問四 傍線部(A)の慣用句「一か八か」について、意味を簡単に説明せよ。

問五 空欄ウに入る二字の言葉を、本文中から抜き出して答えよ。

問六 傍線部(B)について、「魔術化された世界の中を生きている」とはどのようなことが、本文中の語句を用いて説明せよ。

受験記号番号	
--------	--

二、問一～二に答えよ。

問一 次の文中の空欄 (①) ～ (㉑) に当てはまる平仮名一文字を入れよ。答えは文中の () 内に直接記入せよ。

「飲食店」というと、皆さんは (①)) のような店を思い浮かべるでしょうか。

サラリーマン (②)) 真っ先にイメージするのは、会社の近くの行きつけ (③)) 定食屋や、夜な夜な繰り出す居酒屋かもしれません。女子高生の頭に浮かぶのは、放課後に友達 (④)) 長居をするマクドナルドやモスバーガーでしょうか。

主婦にとっては、子供を連れ (⑤)) 安心して入ることができる、近所のガストやデニーズの印象が強いかもしれません。あ

るいは、セレブ (⑥)) 呼ばれる人たちにとっては、飲食店とは、すなわち銀座や六本木の華やか (⑦)) レストラン

やバーのことを指すのかもしれませんが。そして、OLにとって大事なのは、出勤途中に毎朝立ち寄るスターバックスや、オシャレな

イタリアンレストランでしょうか。

飲食店にはここに挙げた以外にも数多 (⑧)) の種類があり、私たちは日常の様々なシーンで利用しています。

では、私たちは実際にこれ (⑨)) の飲食店に一体いくらのお金を使っているのでしょうか。

社団法人日本フードサービス協会の二〇〇七年のデータから計算すると「一人一日、五百三十円」という金額になります。

都会で仕事をしているサラリーマンやOLの中には、「そんなものか」と少なく感じる人もいるかもしれません。実際、毎日のラ

ンチだけ (㉑)) それ以上の金額を支払うケースは多々あるでしょう。

(子安大輔『「お通し」はなぜ必ず出るのか ビジネスは飲食店に学ぶ』〈新潮新書〉による。11～12頁)

問二 次の文中の空欄（ ① ）～（ ⑩ ）に当てはまる日本語表現を直接記入せよ。

今の日本で、生きるとはどういうことかと人びとに問うてみるとしよう。いろいろな答えが返ってくるだろう。特定の宗教を持つ人と持たない人とでは、その答えはきつと ① ）。何か仕事に打ち込んでいる人は、「生きがいを持つ」という意味で「生きる」という語を使うかもしれない。重病に冒されたか、あるいは大けがをして ② ）。人なら、いのちの灯をともしつづけることにその語の意味を ③ ）。かもしれない。あるいは自分にとって一番大切な人がそのような状況におかれているとき、その人のいのちを ④ ）。ことが生きるということだと感じることもあるだろう。

しかしどのような場合にも、そしてどのような立場の人にも ⑤ ）。のが、生きるとは食べるということではないだろうか。むしろ、「人はパンのためだけに生きるものではない」けれども、パンがなければいのちの灯をともしつづけることは ⑥ ）。これほど科学が進み技術が発達しても、人は食べつづけなければならない。人は生まれ落ちてから ⑦ ）。直前まで食べつづけるのである。生きるとは、食べることである。そして人は生きるために、身の回りのさまざまなものを食べてきた。ヒトという種は、この意味で、生態系の一員でありつづけている。

人が、 ⑧ ）。限りは食べつづけなければならないということを改めて意識したのは、宇宙ステーションに滞在する飛行士たちのようすがテレビで ⑨ ）。ときであつた。ハイテクの塊のような宇宙ステーション。その、超ハイテク環境のもとでも、彼らは、じつに古典的な方法で生命をつないでいた。宇宙ステーションで暮らす飛行士たちのいのちをつなぐのが、 ⑩ ）。という、手で口に食品を運ぶ行為に支えられていることに、わたしは新鮮な驚きを感じたのだった。

（佐藤洋一郎『食の人類史 エーラシアの狩猟・採集、農耕、遊牧』（中公新書）による。1～2頁）

三、次の文章を読んで、全体の要旨を二〇〇字以内で記せ。

いわゆるクレーマーの存在がクローズアップされるようになって久しい。難癖のような文句をつける、しつこく苦情を述べ立てる、リンチのような責任追及をする……。これをただちに、消費者の、あるいは市民の、権利意識が高まってきたしるしだと言うのは早計である。わたしにはこれは、言葉の攻撃性とは裏腹に、とても受動的な姿勢に映る。社会サービスを提供する者たちに、クレーマーは「わたしたちをもっと安心してサービス・システムにぶら下がっていただけるようにせよ」と言い張っているようにしか見えないからだ。苦情をぶつけるだけでみずから問題解決に取り組もうとはしない。こうした光景を、いつでもだれかがそれぞれの場所できちんと務めを果たしているはずだという「相互信頼の過剰」から、何か不全が起こるといつもみんなが責任転嫁しようとするという「相互不信の過剰」へと時代が反転しつつある、というふうに表現したひともいる。それにしてもひとびとはいつからこうも受け身な存在になったのだろうか。

出産すること、食材を調達すること、調理すること、排泄物を処理すること、治療すること、看病すること、育てること、教えること、介護すること、看取ること・葬送すること、これら生きてゆくうえで一つたりとも欠かせぬことの大半を、ひとびとはいま社会の公共的なサービスに委託している。医療機関に、学校に、行政サービスに、福祉サービスに、あるいは外食産業に、流通業者に、公益業者に。とどのつまり、社会システムからサービスを買う、あるいは受けるのである。

「生老病死」と言われるいのちのベーシックスは、現代社会ではこのように、公共的な社会システムが面倒をみることになっており、そのプロのサービスに税金を、あるいはサービス料を支払うことで、安心して暮らせるようになっている。寿命は大きく伸び、子どもたちも高学歴になり、いろんな面で安心・安全がきちんと保障される社会になっている。これは福祉の充実（安心と安全）と世間では言われるが、しかし、裏を返して言えば、これは各人がこうした自活能力を一つ一つ失ってゆく過程でもあるのではないだろうか。

じっさいこれら「生老病死」の世話、ほんの数十年前までは、家族のなかで、あるいは近隣住民のあいだで、協力してなされてきた。出産も介護も治療・看病も看取りも、さらには調理、排泄物処理、子育て、教育、葬儀も、ほとんどが自宅もしくは地域住民によって担われてきた。ところが社会サービスの充実とともに、それらのプロセスをひととはプロのサービスに委託するようになった。しかしそうしたサービス・システムが完備してゆくなかで、みずからの手でそれらをおこなう能力をしだいに失っていった。調理、医療、教育だけではない。かつては地域にもめぐりが起こったときも、だれかがその仲裁にあたり、なんとか事をおさめていったものだが、そういう問題解決の能力、ひとびとのあいだに合意をとりつけてゆく能力もわたしたちは失ってしまい、何ごとも役所や弁護士に任せるありさまである。

(鷲田清一『わかりやすいはわかりにくい?』〈ちくま新書〉による。163～166頁)

[illegible]